



第 009 号 2020 年 7 月 10 日 浅野京子

一介の主婦の日常も一変

夫の内科クリニックを手伝い、朗読ボランティア、勉強会等をしながら、時に友人とのランチを楽しみ、たまに芝居に落語に通うシニアライフでしたが、3月からのコロナ禍の中で手帳の予定表は全て×で消されました。

クリニックの方は3月の半ば過ぎから、胃カメラの検査は中止、発熱のある方への対応、スタッフと話し合っただけの診療にあたっての装備、消毒の徹底等々、配慮しなくてはならないことがどんどん増えていき、夫のストレスもどんどん増していくのです。私が受付に立っていた時、マスク無しで入ろうとした患者さんがいて「マスクをしてください」とお願いしたら、その方は耳が変形していて「マスクができないんです」と…。あ～あ、こんな方もいるのかと気づき申し訳なく思いました。今月から検査再開、私も2カ月ぶりに患者さんと接することになりましたが、一人終わるたびに消毒、スタッフの様子を見ていると今までとは違って大変だなあと感じます。

朗読の録音ボランティアは非常事態宣言が出る前に「4月の録音は私共高齢者ばかりなのでお休みしたい」と図書館に申し出て、その後すぐに区の施設そのものが使用できなくなり、4月5月は無しになりました。心の中では我々の吹き込んだカセットテープが届かない多分いまだにカセットデッキを使っている高齢の視覚障害者の方々には申し訳ないと心の中でお詫びしていました。

そして宣言解除後、図書館から録音再開の依頼が来て、6月、7月ととにかく来られる人たちだけでやろうと、いつもの半分の人数で録音してきました。

2月以来休みにせざるを得なかった勉強会も9月には再開する予定ですが、またまた感染者が増加していくなか、今後続けていくことが出来るのか大変心配しています。みんなの年齢を考えると会そのものの存続にかかわっているのです

浅野京子(朗読ボランティアの会代表)